梵文長阿含の *Tridaṇḍi-sūtra* について

松　田　和　信

1　倶舎論における *Tridaṇḍi-sūtra*

『倶舎論（*AKBh*）』第4章「業品」において，ヴァスバンドゥは「戒蘊（Śīlaskandhikā）」の中で世尊によって説かれるとして阿含のフレーズを引用する．ヤショーミトラは，これを「戒蘊」なる「品（nipāta）」であると註釈し，トリダンディン（Tridaṇḍin）を対告衆とする長文の阿含を引用している[1]．これは本庄良文氏の整理番号では4092番にあたる引用であるが[2]，この引用をシャマタデーヴァも「戒蘊の *Tridaṇḍi-sūtra*」と指摘している．さらに業品における他の二箇所の引用阿含（本庄4017番[3]，4087番[4]）も，『倶舎論』自体は言及しないが，シャマタデーヴァによれば同じ *Tridaṇḍi-sūtra* の経文である．これら三箇所で引用される経文の内容は，いずれも所謂「戒蘊定型句」の一部に他ならない．山極伸之氏が指摘しているように[5]，パーリ長部の「戒蘊品（Sīlakkhandha-vagga）」は，戒蘊定型句を持つ阿含経典を集めてひとつの品としたものであり，さらに他の仏教教団の伝承した長部あるいは長阿含にも同様の意図で構成された品が存在することが推定される．なお仮に定型句を含まない経典がその中にあったとしても，先行経典に定型句を譲って，当該経典ではそれが省略されているだけである．従って，ヴァスバンドゥ，ヤショーミトラ，シャマタデーヴァが用いたであろう〔根本〕説一切有部教団の『長阿含』にも当然のことながら「戒蘊品」が含まれ，その中に戒蘊定型句を持つ *Tridaṇḍi-sūtra* が，戒蘊品を構成する一経典として存在したであろうことが，注釈書の指摘からも想像できる[6]．しかし，説一切有部の『長阿含』はすでに失われ，これまでは中央アジア出土のわずかな断簡が認められるだけであった．ところで，三箇所の引用が戒蘊品を構成する経典すべてに現れる定型句の一部であるとすれば，我々にも馴染みのある他の著名経典ではなく，なぜ注釈者は *Tridaṇḍi-sūtra* の名を挙げているのであろうか．事実シャマタデーヴァは三箇所の引用のうち，二箇所（本庄4017番，4087番）では「戒蘊の *Tridaṇḍi-sūtra* など」と

言って，他の経典にも同文が現れることを示唆しているのである．*Tridaṇḍi-sūtra* の対応経はパーリ・ニカーヤにも漢訳阿含にも存しない．その正体は不明であった．しかし，新たな資料が発見された現在では，*Tridaṇḍi-sūtra* の名前が言及されることに理由がないわけではないように思える．

2　説一切有部『長阿含』の「戒蘊品」

今から数年前，90 年代の中頃と思われるが，〔根本〕説一切有部の梵文『長阿含経（*Dīrgha-āgama*）』の樺皮写本が発見された．各種情報を総合すると，発見場所はパキスタンのギルギットの可能性が高い．写本は分割され，ロンドンのマーケットを通して複数の蒐集家に引き取られていった．写本の最終葉が残存していたことにより，その頁番号から判断して，全体で 454 葉からなる巨大写本であった．ただし，前半部分は痛みが激しくて断片しか回収されず，一方，後半部分約 250 葉は幸運にも原形をとどめていた．写本は，縦 10cm，横 50cm 程度の貝葉形樺皮の両面に 8 行づつ書かれている．書写に用いられたギルギット・バーミヤン第 2 型文字，およびオランダのフローニンゲン大学で 2001 年に行われた炭素 14 による年代測定から判断して，8 世紀前半に書写された写本であると見なされる．このように，すべてのフォリオが完全な形で残っていたわけではないが，各品あるいは写本末尾に配された目次（uddāna）により，説一切有部の『長阿含』が第 1 編「六経品（Ṣaṭsūtraka-nipāta）」全 6 経，第 2 編「双品（Yuga-nipāta）」9 組のペアー経典よりなる全 18 経，第 3 編「戒蘊品（Śīlaskandha-nipāta）」全 23 経の，3 編 47 経から構成されることが判明した[7]．ここで問題にしている戒蘊品は，第 1 編に置かれる『パーリ長部』とは対蹠的に，説一切有部の『長阿含』では最終第 3 編に配されていたことにより，奇跡的にその全フォリオが回収された[8]．それによると，果たして戒蘊品の第 1 経は，ここで問題にしている *Tridaṇḍi-sūtra* である．シャマタデーヴァとヤショーミトラの二人の注釈者は，恐らくは，戒蘊品の第 1 経に位置し，それ以降の経典に先立って戒蘊を表明する *Tridaṇḍi-sūtra* を念頭に置いて，この経典名を掲げているのであろう[9]．この経典がパーリ・ニカーヤに対応経を持たず，さらには有部の『長阿含』が漢訳されなかったため，我々にはなじみがないだけで，当時の説一切有部三蔵に親しんだ人であれば，戒蘊品の冒頭に置かれた著名経典であったはずである．

3　戒蘊品第1経 *Tridaṇḍi-sūtra* と第2経 *Piṅgalātreya-sūtra* の内容

『長阿含』の戒蘊品を構成する23経のうちで，*Tridaṇḍi-sūtra* に続く戒蘊品第2経は *Piṅgalātreya-sūtra* である．この経典も *Tridaṇḍi-sūtra* と同様，パーリ・ニカーヤおよび漢訳に対応経は存しない．内容的には *Tridaṇḍi-sūtra* に酷似する．以下，両経の内容を併せて紹介する[10]．

Tridaṇḍi-sūtra（folios 360v2-367r4）

(360v2) evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān rājagṛhe vihara[t]i (veṇvane kalandakanivāpe | atha) [tṛ]daṇḍī parivrājako [yena bhagavāṃs tenopasaṃkrānta](ḥ | upasaṃ-) kramya bhagavatā sārdhaṃ saṃmukhaṃ saṃmodanīṃ saṃraṃjanīṃ vividhāṃ kathā(ṃ) vyatisāryaikānte niṣaṇṇaḥ (|) e[kā](ntaniṣaṇṇas tṛdaṇḍī pari)[vrā]jako bhagavantam idam avocat (|) brāhmaṇa bho g[au]tama dharmyayā bhaikṣacaryayā bhogān samudānīya traividyeṣu brāhmaṇeṣu dakṣiṇāṃ pratiṣṭhāpayanti traividyeṣu bho[gā] .. .. [brāhmaṇe](ṣu) .. .. -pitā atyarthaṃ mahāphalā bhavanti mahānuśaṃsā(ḥ |) kiyatā tridaṇḍin traividyo bhavati (|) iha[11] bho gautamo brāhmaṇo bhavaty upeto mātṛtaḥ pitṛtaḥ saṃśuddho grahaṇyā[ṃ] anākṣipto jā[ti](vādena gotra)vādena yāvad āsaptamaṃ mātāmahaṃ pitāmahaṃ yugam upādāyādhyāpako[12] mantradharaḥ trayāṇāṃ vedānāṃ pāragaḥ sanighaṇḍukaiṭabhānāṃ sākṣaraprabhedānām itihāsapañcamānāṃ padaśo [vyākara](ṇo) ['bhirūpo] darśanīyaḥ prāsādikaḥ .. (|) iyatā bho gauta[ma] brāhmaṇānāṃ traividyo bhavati | anyathā khalu tridaṇḍin[13] ārye dharmavinaye traividyo bhavati (|) yathākathaṃ bho gautama ārye dharmavinaye traividyo [bhavati] (|)

[iha tri]daṇḍi(n) śāstā loka utpadyate tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddhaḥ vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathi(ḥ) śāstā devamanuṣyāṇāṃ buddho bhagavā[n] (361r1) sa dharmaṃ deśayaty ādau kalyāṇaṃ ....

以下「破僧事」に現れる沙門果経戒蘊定型句 (Gnoli ed., pt. II) pp.230.11 (§37) -240.18 (§63) と同文のため省略[14]

(366r3) sapakṣe nivaraṇāni prahāya cetasa upakleśakarāṇi prajñādaurbalyakarāṇi vighātapakṣyāṇy anirvāṇasaṃvarttanīyāni viviktaṃ kāmair viviktam pāpake(na) + + + -rthaṃ dhyānam upasaṃpadya viharati (|)

sa evaṃ samāhite citte pariśuddhe paryavadāte anaṃgaṇe vigatopakleśe karmaṇye sthite āniṃjyaprāpte ...

以下「破僧事」に現れる沙門果経六神通定型句の中の三明相当分（宿命，死生，漏尽）と同文 (Gnoli ed., pt. II) pp. 249.3 (§83) -250 最終行 (§85)．但し abhijñā（神通）の語の代わりに vidyā（明）の語を使用．

(366v8) atha bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ gāthāṃ bhāṣa(te) |

pūrveni(367r)vāsaṃ yo vetti svargāpāyāṃś[15] ca paśyati |

atha jātikṣayaṃ prāpto vijñānavyavasito(*sic*) muni(ḥ |)

cittaṃ vimuktaṃ jānāti muktaṃ rāgeṇa sarvaśaḥ (|)

vidyātrayeṇa saṃpannas traividyas tena kathyate |

iyatā[16] [tṛdaṇḍin ārye dharmavina]ye traividyā(ḥ |) haṃta bho gautama gamiṣyāmo bahukṛtyā(ḥ) smo bahukaraṇīyā(ḥ |) yasyedānīṃ tṛdaṇḍi(n) kālaṃ manyasa ity (|) atha tṛdaṇḍī parivrājako bhavato bhāṣitam abhina[ndyānumodya bhagavato] 'ntikāt prakrāntaḥ (||)

antaroddānam[17] ||

(1, §41) bījāni (2. §42) sannidhikuryā (3, §43) mahāśayana (4, §44) maṇḍalaṃ

(5, §45) darśanaṃ (6, §46) śramaṇaṃ (7, §47) dyūtaṃ (8, §48) kathā (9, §49) vigrahakena [ca]

(10, §50) rājādūtāś ca (11, §51) kuhanāvargo bhavati sa + dditaḥ

(12, §52) u[tpātāś ca] (13, § 53) [muhūrttā]ś ca (14, §54) cikitsā (15, §55) maṇilakṣanam

(16, §56) ājavanam (17, §57) ā[va]hanaṃ (18, §58) bhayaṃ (19, §59) rājāparājayaḥ

(20, §60) tathā ca candrasūryābhyāṃ (21, §61) vipāko bhavati paścimaḥ ||

Piṅgalāreya-sūtra (folios 367r4-369r5)

(367r4) evaṃ mayā [śru](ta)m ekasmi[n sama]ye bhagavāṃ rājagṛhe viharati veṇuvane kalandake nivāpe (|) atha piṃgalātreya(ḥ) parivrājako yena bhagavāṃs tenopasaṃkrānta(ḥ|) upasaṃkramya bhagavatā (sārdhaṃ) saṃmukhaṃ saṃmodanīṃ saṃraṃjanīṃ vividhāṃ kathāṃ vyatisāryaikānte niṣaṇṇaḥ (|) ekātaniṣaṇṇaḥ piṃgalātreya(ḥ) parivrājako bhagavataḥ puratas tasthād udānam u[dā] .. .. ti | ity api traividyā brāhma[ṇā] ity api [trai]vidyā brāhmaṇā iti (|) kiyatātreya brāhmaṇānāṃ traividyo bhavati (|) iha bho gautama brāhmaṇo bhavaty[18] upeto mātṛtaḥ pi[tṛta](ḥ saṃśuddho) grahaṇyā(ṃ) anākṣipto jātivādena gotravādena yāvad āsaptamaṃ[19] mātāmahaṃ pitāmahaṃ yugam upādāyādhyāpako mantradharas trayāṇāṃ vedānāṃ pāragaḥ (sanighaṇḍukai)(367v)ṭabhānāṃ sākṣaraprabhedānām itihāsapaṃcamānāṃ padaśo[20] vyākāro 'bhirūpo darśanīyaḥ prāsādikaḥ (|) yadā bho gautama brāhmaṇānāṃ traividyo bhavati (|) na khalv ayāy(*sic*)ātreya .. /// (367v2) -trakeṇa na palitaḥ lo-

pitamātrakeṇārye dharmavinaye traividyaṃ prajñāpayāmi (|) yanv aham āryeṇa nyāyeṇārye[21] dharmavinaye traividyaṃ prajñāpayāmi yathā[ka]tham bhavāṃ(*sic*) gau[ta](māryeṇa) nyāyenārye dharmavinaye traividyaṃ prajñāpayati (|)

ihātreya śāstā loke utpadyate tathāgato 'rhat saṃyaksaṃbuddho .....

以下「破僧事」に現れる沙門果経相当部と同文（Gnoli ed., pt. II）pp. 230.11 (§ 37)-232. 11 (§37).

(369r3) pūrvavad vi[sta]reṇa yathā tṛdaṇḍisūtre (|) tatra ko viśeṣaḥ (|)

pūrvenivāsaṃ yo vetti svargā[pā]yāṃś ca paśyati |

atha jātikṣayaṃ prāpto 'bhijñāvyavasito muniḥ (|)

cittaṃ vimuktaṃ jānāti muktaṃ rāgeṇa sarvaśaḥ (|)

tad ahaṃ vadāmi traividyaṃ na yo lapitapāvakaḥ |

atha [piṃ]galātreyaḥ parivrājako bhagavato bhāṣitam abhinandyānumodya bhagavato 'ntikāt prakrāntaḥ ||

写本に一部欠落が見られるため，全体を完全に復元することはできないが，その概略は理解することができよう．前述のように *Tridaṇḍi-sūtra* は戒蘊品の冒頭にあって，戒蘊を定義する経典である．『長阿含』を構成する一経典であるにもかかわらず，これだけの分量に過ぎないのは，ローマ字転写中に示したように，戒蘊定型句が『根本有部律』の『破僧事（*Saṅghabheda-vastu*）』に現れる『沙門果経』相当部中の戒蘊定型句と同文であるので省略し，それに続く三明の箇所も，同じく『沙門果経』相当部に含まれる六神通の説明箇所中の三明に相当する宿命，死生，漏尽と同文であるので省略すると，これだけで全文を紹介したことになってしまう．経典末尾の二偈のうち，第一偈はかつて榎本文雄氏によって考察された偈に他ならないが，この写本によって新たな資料が加わることになる[22]．

続く第2経の *Piṅgalātreya-sūtra* もプロローグおよびエピローグの一部と対告衆の名前がトリダンディンからピンガラ・アートレーヤに代わる程度で，実質的な内容は *Tridaṇḍi-sūtra* と同じである．この第2経も *Tridaṇḍi-sūtra* と同様，*Saṅgha-bheda-vastu* に現れる『沙門果経』相当部は省略して提示した．ただし，写本の分量は *Tridaṇḍi-sūtra* が7葉であるに対し，こちらは，わずか2葉半にすぎない．これは筆者ではなく，写本自体が途中で文章を中略し，*Tridaṇḍi-sūtra* の名前を掲げて，それと同文であることを注記しているからである[23]．

4　二つの経典とパーリ増支部の二経典

Tridaṇḍi-sūtra ではトリダンディンなる遍歴行者（parivrājaka）が世尊に対して三明（trividyā），つまり三ヴェーダをそなえた婆羅門に布施をすれば大いなる結果がもたらされると主張し，自分の立場から三明をそなえた婆羅門を説明するが，それに対して世尊は，戒蘊を提示した上で，三ヴェーダとは異なる仏教側の三明を主張して真の婆羅門とは何かを明らかにする．一方，*Piṅgalātreya-sūtra* は「三明に通じた婆羅門，三明に通じた婆羅門というけれども，それは一体何か」という質問から始まり，遍歴行者のアートレーヤと世尊がそれぞれの立場から三明について説明するという内容を持つ．プロローグの後は，*Piṅgalātreya-sūtra* のエピローグ部分が短くなっているだけで，二つの経典の中心部分は同文である．

ところで，これら二経典のパーリおよび漢訳阿含の対応経は存しないと述べたが，パーリ増支部「婆羅門品」の二経典 *AN*.III.58（Tikaṇṇo）と 59（Jāṇussoṇi）に注目しておきたい[24]．58 は「三明に通じた婆羅門，三明に通じた婆羅門というけれども，それは何か」という疑問から始まり，59 の方は「三明をそなえた婆羅門に布施すべし」ということから説き出され，その後は二つとも同文で三明が提示され，最後には『長阿含』の二経典末尾の 2 偈とパラレルな偈も現れる．つまり，58 は *Piṅgalātreya-sūtra* に，59 は *Tridaṇḍi-sūtra* にその構成が完全に一致している．ただし，増支部の二経典は「婆羅門品」に属するためか，『長阿含』の二経典と異なって戒蘊定型句は現れない．戒蘊定型句を欠くため，この両者がパーリ対応経ということはできないのかもしれないが，これらが恐らくは同一の源泉文献から枝分かれして成立したものであることは間違いないであろう．58 に現れる対告衆の *Tikaṇṇa*（Skt. Trikarṇa）が『長阿含』に現れる Tridaṇḍin という人物名と無関係ではないようにも思える．如何なるソースから如何なる言語的変遷を経て，このような二つの語形が現れるのか筆者には説明できないが，Tikaṇṇa なる人物名は，検索した限りではパーリ・ニカーヤではこの箇所以外には見出されない．ともあれ同一ソースに由来すると思われる経典がパーリ・ニカーヤ中にも見出されることからして，*Tridaṇḍi-sūtra* と *Piṅgalātreya-sūtra* が，説一切有部『長阿含』のみに含まれるところの，説一切有部においてゼロから作成された独自経典であると断言することはできないであろう．

---

1)　*AKBh*, Pradhan 1st ed., 255.13, *Yaśomitra*, *Wogihara* ed., 420.18ff.

2) 本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料－業品（4)」『神戸女子大学教育研究論文集』8巻（1994）p. 43.

3) *AKBh*, Pradhan 1st ed., 208.23, 本庄良文「シャマタデーヴァの伝える阿含資料—業品(1)」『神戸女子大学文学部紀要』26巻（1993）p. 182.

4) *AKBh*, Pradhan 1st ed., 247.13, 同上本庄（4）p. 41.

5) 山極伸之「パーリ長部「戒蘊品」と律蔵」『佛教大学文学部論集』80号（1996）pp. 35-50.

6) 本庄良文「ウパーイカー所伝の長阿含」『印度学仏教学研究』33-2（1985）参照.

7) 共同研究者のイェンス＝ウヴェ・ハルトマン（ミュンヘン大学）によってすでに数点の報告が発表されているが，先立つ報告内容を含む最新のものとして，Jens-Uwe Hartmann, "Contents and Structure of the *Dīrghāgama* of the (Mūla-)Sarvāstivādins"，『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第7号（2004）pp. 119-137　がある.

8) 写本の葉番号でいえば戒蘊品は第360葉から最終454葉までをカヴァーする．この部分の所在については，我が国の平山郁夫画伯が360葉から363葉，および367葉から384葉までを，佛教大学が364葉から366葉までを，米国の匿名収集家が385葉から最終454葉までを購入している.

9) ちなみに *AKBh* における3箇所の引用文については，本庄4017番が写本365v3に，4087番が366r1に，4092番が363r1-6に見出される.

10) 以下は単純なローマ字転写に必要最小限の校訂を施したものである．読解に必要なダンダは括弧に入れて補い，文章に段落を付けた．またアヴァグラハは写本には一切認められないが，括弧なしで補った．さらに写本の破損部分で，現時点で筆者に復元できない箇所は転写に用いた記号のまま放置した．また本文中に示すように，『破僧事（*Saṅghabheda-vastu*）』と同文箇所は省略する.

11) 以下の長文は婆羅門を形容する定型句．諸処にみられるが，対応するパーリ文は，後述 *AN.* III.58 など参照．類似した梵文は *Divyāvadāna*, Cowell ed., p. 620.14-20.

12) Ms. upadhyāpako.

13) Ms. tridaṇḍīn.

14) 『破僧事』に含まれる『沙門果経』相当部分は，梵文仏典研究会（平岡聡，山極伸之ほか）による「梵文『沙門果経』和訳（1)」『佛教大学仏教学会紀要』2号（1994）pp. 1-32「同（2)」同3号（1995）pp. 17-57に和訳が発表されている.

15) Ms. svargapāyāṃś.

16) Ms. iyaṃtā.

17) 以下の21項目は『沙門果経』相当部の戒蘊定形句のうち，§41から§61までの21パラグラフから代表する言葉を取り出して並べたものに同じ．但し若干の混乱あるいは意味不明語があるため，現時点では完全には復元できない．前掲「山極論文」37-39頁に示される戒蘊一覧の第8項「種子・草木の保護」以下に対応する.

18) Ms. bhagavaty.

19) Ms. āsaptayaṃ.

20) Ms. padaśoṃ.

21)　Ms. nyāyeṇāryeṇa.

22)　榎本文雄「仏教における三明（tisso vijjā）の成立」『印度学仏教学研究』29-2（1981）pp. 939-936, 同「初期仏典における三明の展開」『佛教研究』12 号（1982 浜松）pp. 63-81 参照．なお *Tridaṇḍi-sūtra* の 2 偈は『雑阿含』1161 経の 2 偈と同一であろう．「宿命憶念智　見生天悪趣　得諸受生尽　牟尼明決定　知心善解脱　解脱一切貪　具足於三明　三明婆羅門（大正 2, 309c-310a）」．ただし *Piṅgalātreya-sūtra* 末尾の 2 偈のうち，第 2 偈後半句は *Tridaṇḍi-sūtra* の偈と異なり，後述 *AN.* III.58 & 59 末尾に現われる偈に対応する．

23)　末尾の 2 偈に先立つ文章がそれであるが，この中の viśeṣa の用例については，漢訳『雑阿含』第 7 巻第 140-141 経（大正 2, 43a）に見られる「次経亦如是．差別者・・・」あるいは *AKBh*, *Yaśomitra,* Wogihara ed., p. 275, *l.*, 11-12, etad eva sūtram uktvā'yaṃ viśeṣaḥ... 等と同じであるとの御教示を学会発表後に本庄良文氏より得た．御礼申し上げる．

24)　PTS. ed., *AN*, vol. I, pp. 163-168.

（本稿は平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）による研究成果の一部である）

〈キーワード〉　長阿含経，Tridaṇḍin，戒蘊，梵文写本

（佛教大学教授）

新刊紹介

Bibliotheca Indologica et Buddhologicall
李　鐘徹

『梵蔵文阿毘達磨倶舎論　9　破我品』

B5 版・190 頁・定価 6,500 円
山喜房佛書林・2005 年 8 月

as different from individuals; and 3) as the universal and individuals are different, one can never define the relation between the universal and individuals. Against this, the Sāṃkhya school accuses the Apoha theory of committing the same faults. Commenting on Dharmakīrti's reply to this objection, Śākyabuddhi offers his three-fold interpretation, whereby Śākyabuddhi suggests that *anyāpoha*, if considered to consist in an external object or in an internal consciousness, should not be regarded as something perdurable.

175. The *Tridaṇḍi-sūtra* in the *Dīrgha-āgama* Manuscript

Kazunobu MATSUDA

In the *Dīrgha-āgama* manuscript recently discovered in Gilgit, the *Tridaṇḍi-sūtra* forms the first text of the last section named Śīlaskandhika. Up to now its existence was only known indirectly from quotations such as in the *Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra and the *Abhidharmakośaṭīkā Upāikā* by Śamathadeva. However, no sūtra connected with the name Tridaṇḍin is found in Pāli or in Chinese and Tibetan translations. I briefly report on the contents of this new sūtra along with the second text, the *Piṅgalātreya-sūtra*, which has a similar contents as the *Tridaṇḍi-sūtra*, and on their position in the *Dīrgha-āgama* of the Sarvāstivādin Buddhist order. I also point out the similarity in structure of the *Tridaṇḍi-sūtra*, as well as the *Piṅgalātreya-sūtra*, with two Pāli sūtras, and speculate that they may have derived from a single source.

176. On the "Five Types of Quest" in the *Mūlamadhyamakakārikā*

Chiaki OZAWA

The purpose of the *Mūlamadhyamakakārikā* is to declare *niḥsvabhāvatā*. For this purpose, Nāgārjuna reveals the opponents' contradictions through various means, and proves *niḥsvabhāvatā*. There are "five types of quest" in his argument. The "five types of quest" adds a denial of difference to the argumentation against wrong views found in Early Buddhism, and leads to